

# 果実と細胞の深層世界 — 螺鈿のマチエール

## 論文要旨

果実は多様な形態を持っている。皮が見せる外部形態だけでなく、皮をむいた時の形態、ナイフで切った様々な角度の断面など個性的である。私は果実の粒をモチーフの単位とするが、今回の提出作品では内部のイメージをより強調するため、果実内部の世界を表現し、そこに成り立つ様々な様相を、細胞の形状になぞらえてイメージ化した。

私は早くから、微視的世界や小さな要素による世界、またその要素が凝集した形態に関心を持ってきた。映画鑑賞が趣味だった私は、子供の頃から様々な映画、特に SF 映画からインスピレーションを得てきた。特に影響された映画『Ant-man』の主人公のように、体が大きくなったり小さくなったりする中での経験と、世界を見る視線の変化が興味深かった。グラフィックスの発達は、細胞から素粒子、さらに小さな要素まで、それらが存在する世界をリアルなヴィジュアルで観客に提示した。

私は、そうした作品とこれまで受けた教育課程を通じて、観者が認識する世界の形態や規模を、変化させられることを知った。そこから、観者が小さくなった時に認識できる世界や、顕微鏡で拡大した時に認識できる世界を、重ね合わせて作品化するためのモチーフを探した。そうした「微視的世界」として、もっとも認識しやすく、形態的にも多様な特徴を示す“細胞”にたどり着いた。しかし細胞には形の定まっていないものが多く、一般的には観察しづらい問題点がある。そのため、細胞をイメージさせる他のモチーフとして、細胞と構造的な特徴が似ている果実を用いることにした。

細胞には表面をおおう膜がある。それは動物か植物かで、細胞膜と細胞壁に分かれるが、一つの殻のような膜で細胞の形態を維持している。その内側には、細胞が生きるための内容物があり、中央には細胞の増殖をになう核が存在する。同様に、果実にも表面をおおう皮があり、その内側に食べられる部分の実と、数を増やす種子がある。果実と細胞は、こうした相似する3つの構造から成り立っている。

果実の興味深い内部も、拡大すると木肌や花のように見えたり、細胞の集合体のように見え

たりする。ここから私は、果実と細胞の様々なイメージを交錯させながら、作品制作を進めようと考えた。

また制作方法として、私が漆芸と螺鈿という素材を選んだのは、細かく割られて貼られた貝の光と、色味の美しさに魅了されたためである。

螺鈿技法では、貝の厚さを調整するジュルムジル、タチャル法といった技法を主に用いる。それ以外の韓国と日本の伝統的、現代的技法も併用し、貝の厚さで平面上に立体感と奥行きを表し、果実の内部世界を表現している。

日本の漆芸で初めて知ったのが、韓国とは異なる貝の薄さだった。皿や椀、乾漆技法による箱、指物などの厚さ、そして螺鈿技法に用いる貝でも、日本のほうが薄い。厚さの違いが、日本と韓国の螺鈿技法を貫く基本的な違いではないかと思われるが、本研究ではむしろその違いを利用して創出したマチエールの表現について論述する。

本論文は3章で構成される。

第1章 「果実と細胞」では、果実と細胞の構造的な類似性を確認し、果実の内部世界と微視的世界を連結させる形態的な特性を考える。細胞の多様な形態と様々な果実の断面を用いて、それらのイメージを重ね合わせて微視的世界を表現化する方法について論じる。

第2章 「螺鈿のマチエール」では、螺鈿技法の説明や、貝の厚さを利用した技法と表現について論述する。漆芸の中でも螺鈿技法を選択した理由と、私が考える螺鈿技法の特異性と魅力について論述する。また日本、韓国で異なる貝の厚さや、多様な技法を利用した、螺鈿による立体的表現について考察する。

第3章 「提出作品『Penetralia』」では、「Penetralia 1」から「Penetralia 5」にいたる制作過程と制作意図を説明する。1章と2章で論述したイメージが、どのように作品化されているかを論述する。